

「校門一礼」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 新春、こんなことを思っているのです

この4月に県立神戸高等学校に赴任した私は第22代校長となりました。第16代校長は最初の通信に書かせてもらった岡野幸弘先生です。県教委に勤務することとなった私に、先生は心構えを説いてくれました。

「学校の先生方はみんな必死に頑張っているんです。あんたはその先生方を指導しないとイケない立場になった。それなら先生方から『ああ、こいつはちょっと違うな。こいつの話なら聞いてもいいか』そう思われる存在にならないと駄目です。『県教委って、この程度か』そう見下されたら私たちの存在に意味はありません。しっかり勉強して、成長しなさい。あんたには格好いい指導主事になってほしいんです」

格好いい外見をした指導主事になるのは不可能ですが、努力を重ねて「こいつはちょっと違うな」と思われる程度の内面をもつ人にはなりたいと強く念じながら、働くことができたのは岡野先生のお蔭です。

第17代校長の溝口繁美先生と第18代校長の竹内弘明先生には私が40代前半の頃から部下として仕え、多くを教えていただきました。今はお2人とも新天地にて活躍しておられます。その新天地に触れた過去の通信に私がお2人に教わったことも交えていますので、今回はその通信から一部抜粋して添えますね。

第19代校長の中野憲二先生は私が県教委のルーキーの年に、いわゆる直属の部下として県教委のイロハから教えていただいた先輩です。当初はよく指摘されました。「あんたの書く文章はよく言えば情緒的だけど、行政としては冗長や」と。通信などばかり書いていた教諭時代の柔らかさが抜けなかったのですね。確かにお役所の文書に情緒は不要。よく文章を直していただきました。自分勝手に生意気で、そのくせ甘っちょろい私を一人前の行政職員となれるよう粘り強く導いてくれたのは、まぎれもなく中野先生でした。

第20代校長の世良田重人先生はとにかく優しい方でした。先生の部下として働いている頃に、私の両親への遠距離介護が始まったのですが、そのことも気にかけてくださいました。ひとつ忘れられないエピソードがあります。その優しい世良田先生が課長という役職につかれた時、何か違うオーラを1枚纏われたように私には見えたのです。失礼な私は思ったことをそのまま口にしました。すると先生は言われました。

「わかりますか？ 嬉しいな、ありがとう。実は先輩に教わったんですよ。『トップはかわしたり、いなしたりしたらあかん。がっぷりよつの横綱相撲で物事に向き合なあかん』って。だから、今はそれを心掛けながら、仕事をしているんです」 世良田先生。先生の教え、私は今も大切にしていまして日々を生きています。

第21代校長の西田利也先生とは同じ年から県教委で勤め始めました。感情の起伏が激しい私と違い、いつも冷静沈着な先生は、私にとってはずっとお兄さんのような存在でした。つらかった時も先生がいたから乗り切れたと思うことが何度もありました。だから校長職を引き継げたことは実に光栄なことなのです。

毎朝、校門を抜ける際、私は立ち止まり一礼することになっています。胸の中で唱えます。『今日も1日、生徒たちをお守りください』と。唱える相手は私をここまで導いてくれた6人の先代校長先生方です。もともとはかねてよりお慕っていた県立高校の校長先生が校門一礼をされているのを知り、「それは私もしたい」と思ったのが始まりです。ちなみにその方は今、私立高校に勤めておられますが、そこではかねてより全校生徒が同じように頭をさげているそうです。素敵な学校文化だと思います。

さあ、明々後日は3学期始業式です。誰ひとり生命を落とすことなくその時を迎えられそうで、それはとても嬉しいことです。加えて終業式で宿題を課しましたね。自分について考えること、できましたか。1人でも多くの生徒がちょっとだけ晴れやかに校門を通れますように。



「進撃のリンリンチャンチャン」

高校教育課長
新谷 浩一

○ チャンチャンのお話

高校教育課長から教育次長を経て神戸高校の学校長で卒業された竹内弘明先生は手品師でもありました。次々と新しいネタを仕入れては披露してくださるのですが手品をするには当然、道具が必要です。教育次長の頃はそういったものを次長室に取り寄せていたようで、当時、教育長秘書をされていた辰田副課長によると「大きな荷物が次長室に運び込まれたりしていましたよ」とのこと。さすがですね。

竹内先生のことはこれまでも何度か通信に書いてきました。去年の8月の通信のプレイバックです。

僕にとって竹内先生は教職員課管理主事の先輩であり、高校教育課長の先輩でもあります。『学校に関わるすべてに愛しみの心と感謝の心を持つこと』、『しんどい局面が多々あっても、今の職を楽しむこと』、『硬軟をあわせ持つ存在になること』等、これらすべてを仕事の心得として僕は竹内先生に教わりました。僕の記憶の中では竹内先生がご自身のことで愚痴られたことなどありません。その姿勢はあまりに潔く、格好が良くて、僕にはとてもできないことです。

○ リンリンのお話

一方、教職員課長から教育次長を経て神戸高校の学校長で卒業された溝口繁美先生についてはこれまで一度も通信で触れてません。書くことがないのではありません。書きにくいことが多すぎるのです。

神戸高校の校長先生をされていた時にはこんな話もありました。体育大会当日の開会式、溝口先生はキャップを目深にかぶり開会の挨拶。その後、すぐに理髪店に行き頭を丸めると、再びキャップを深くかぶり、何事もなかったように体育大会を観戦。さて、閉会式。通常の挨拶をしたあと、締め言葉です。「今日一日の皆さんの頑張りに…」そこでキャップを脱ぎますと「脱毛(脱帽)や」と一言。

その瞬間、残念ながらグラウンドは深い静寂に包まれたそうです。ちなみに右の写真はその日の慰労会で教員の方が撮られた1枚です。少し照れた、でも何処か誇らしげな素敵な笑顔です。よく飲みよく笑い、周りをいつも明るい気持ちにさせてくれる溝口先生。でも、僕には当時の溝口次長から何度かたしなめられた記憶があります。



忘れられないのは44歳のとき。大きな仕事を自ら引き受けようとした僕に溝口先生は無然とした表情で質問をされます。「あんた、昨日ベッドに入ったのは何時や？」と。3時か4時ですかねえ、と答えました。当時の僕らは冬になると別室にベッドが用意され、毎日のように徹夜作業をするのが当たり前だったのです。すると、溝口先生は「3時、4時は昨日と違うやろ。もう今日や」と厳しい口調です。

「今でさえ、そんな働き方をしているんやろ。そのうえそんな仕事を引き受けたら、どうなるんや。いつまでもあんたも若くないで。それに、あんたがそれを始めたら、あんたの後輩達も皆、それをせなあかんのやで。それだけの覚悟を持って、あんたはこの話を持ってきたんか」 溝口先生の言葉に涙が出そうになりました。僕らの働き方を心配しての無然とした表情だったのです。本当に優しい方です。

さて、この2人の先輩が『リンリンチャンチャン』という名でコンビを組み、天下のM-1グランプリの1次予選を突破したというニュースを教えてくれたのは中村専門員です。日々、期待通りのご活躍をいただいています、加えてこうしたレアな芸能情報までいただけるのは嬉しいですね。

ちなみに僕にとっては大先輩のお2人ですが、管理班の藤村さんにとっては高校1、2年生の時の校長先生と、3年生の時の校長先生だそうです。藤村さん、幸せな高校生活でしたね。

